コニカミノルタグラフィックイメージング
ハイクオリティカラーレーザープリンター
「ページマスターPro6500」

# ワンストップサービス体制構築へ

## A4・65枚の高速出力
## 小ロットにスピード対応

ソーゴー印刷

ソーゴー印刷㈱（神奈川県小田原市扇町四ノ八ノ四七、上原健一社長）は、仕事が小ロット化するなか、ITやデータベースの構築などを活かすために菊半裁四色機を廃棄してコニカミノルタグラフィックイメージング㈱のハイクオリティカラーレーザープリンター「ページマスターPro6500」を導入、小ロットに徹したスピード対応とワンストップサービスを行う体制を目指している。

ソーゴー印刷は、地元の小田原市役所や市立病院、民間企業・商店などを得意先として昭和三十九年に創業した。

その後、一般印刷物の増加とともにカラー印刷も急増し、平成元年に念願の菊半裁四色機、さらに平成四年にMacDTPシステムを導入、箱根・湯河原地区の温泉旅館やホテルのパンフレットや絵はがき、ポスター、チケットなどの企画・制作・印刷に従事するほか、近郊の自治体、民間企業・商店など幅広くニーズに応えている。

上原社長

倉坂部長

また、平成十四年にはインテリジェントRIPを搭載したWinDTPシステムも導入し、WordやExcel、PowerPointなどで作成したデータやPDFデータにも対応する体制を取り、二十一世紀の印刷業を考え、デジタル技術によるDTP印刷やネットワーク・通信・サーバーなどのITをはじめとしたデータベースパブリッシング構築へ向け、社員一二人の少数精鋭で印刷情報加工技術の向上を目指している。

そのような中、今年二月に菊半裁四色機を廃棄し、コニカミノルタグラフィックイメージングのハイクオリティカラーレーザープリンター「ページマスターPro6500」を導入した。

菊半裁四色機の廃棄と「ページマスターPro6500」の導入の経緯について上原健一社長は「四色機を導入して十八年が経過し、老朽化が目立ち、三年くらい前から更新を模索してきた。今、四色機を導入するのなら、CTPも必要であり、これらを合計すると一億円以上の投資になる。しかし、現在の印刷業界の置かれている状況では、当社のような小規模の印刷会社が簡単に決断できる金額ではなく、四色機と並行して少ない投資の電子写真方式のデジタル印刷機の導入も検討してきた。もともと当社が担当している小田原、箱根・湯河原地区の印刷物は、少ないロットが近年さらに少なくなっており、併せてITやデータベースの構築などがデジタル印刷機で活かすことができ、大ロットの場合は外注すればよいと考えた」と当時の心境を語ってくれた。

内心では、デジタル印刷機に傾きながらも、印刷会社のシンボルである枚葉四色機を廃棄することに決断がつかない状況が続いた。

それは当時の電子写真方式のデジタル印刷機は、品質や生産性などの全てにおいて満足のいくものではなく、さらに使用する用紙が限定され、熱によるカールや伸縮も気になったからだ。

そのようななか、昨年九月にコニカミノルタグラフィックイメージングからハイクオリティカラーレーザープリンター「ページマスターPro6500」が発表され、実際にデモを見た。

同機の特徴である毎分A4判六五枚の高速出力に加え、六四㌘～三〇〇㌘までの幅広い用紙坪量、新デジタルトナーを使用した一八〇〇dpi×六〇〇dpi相当の滑らかな画像・線画の再現性、RIP強化による文字輪郭を抽出した文字品質向上、用紙にかかる熱負荷の低減による用紙のカールや伸縮の抑制、高い表裏印字見当精度など、高品質と高生産性が大幅に強化されたことを実感し、「ページマスターPro6500」の導入と菊半裁四色機の廃棄を決定したという。

二月の導入から、まだ間がないが、「ページマスターPro6500」の効果は徐々に出始めている。

まず、これまでの仕事の効率化に貢献しており、印刷・製本・工程の責任者である倉坂哲也部長は「これまで行っていたホテルでの婚礼関係の印刷物は、もともと一〇〇枚程度のものが多く、シャープな文字と熱によるカールもなく、『ページマスターPro6500』の最も得意とするところだ。さらに名刺もこれまではロゴなどをあらかじめカラー印刷しておき、文字だけ追い刷りしていたが、現在は一二面付けして、予備を含めて出力して断裁、箱詰めして製品化し、高品質と高い表裏印字見当精度で好評だ」と話す。

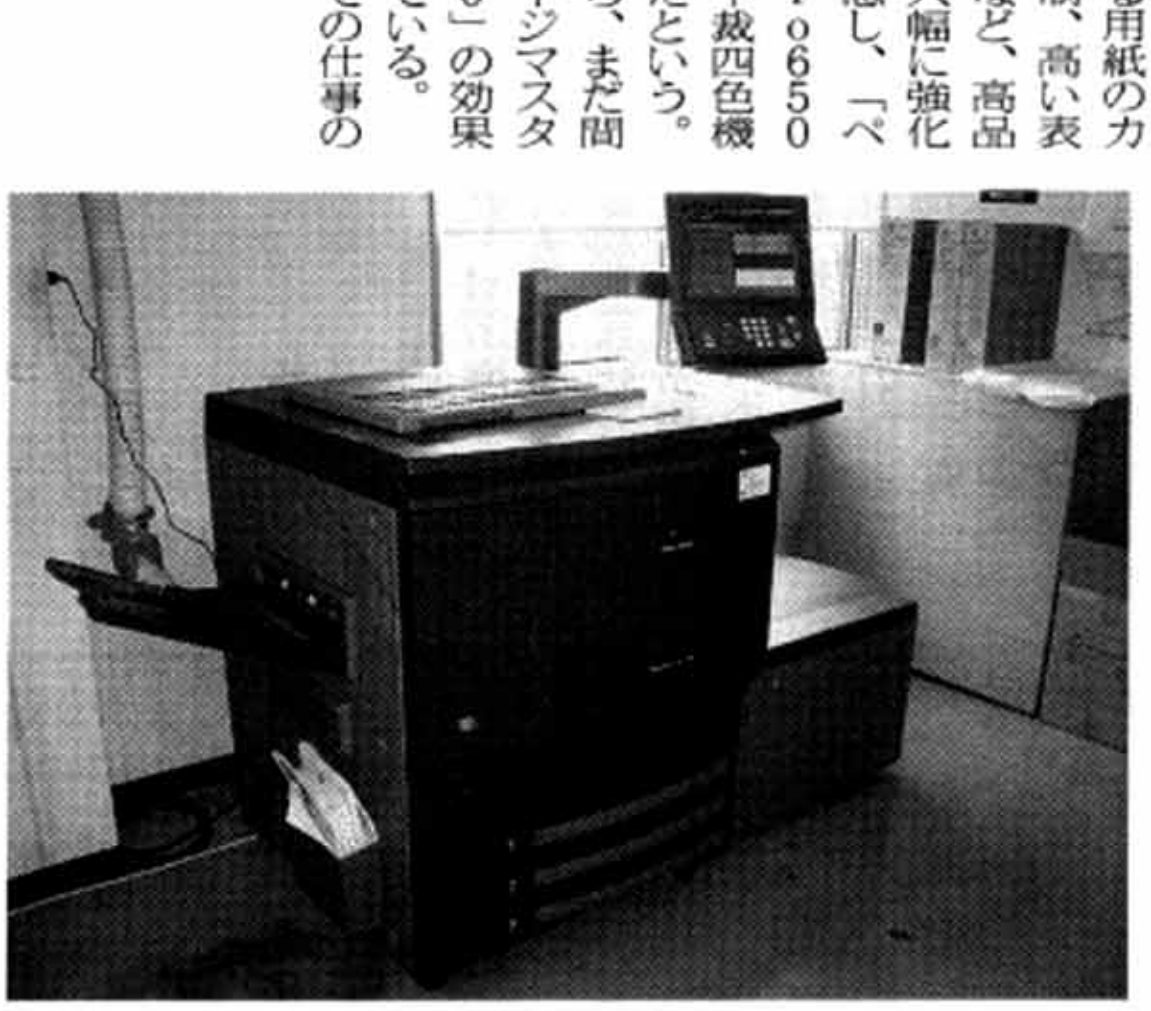
また、枚葉四色機がない分、仕事の中心は小ロットになり、これまで以上に小ロットの仕事を積極的に受注するようになってきた。小ロットの仕事は、予想以上に多く、掘り起こすことで新たな仕事が生まれてくることを実感している。

さらに箱根・湯河原地区の温泉旅館やホテルのパンフレットなどの印刷に加え、DMの発送まで請け負うことになり、ワンストップサービスにより、仕事の幅も広がっている。今後はお客さまのニーズに合わせたDMの中身と宛名もバリアブル印刷を行う構想も持っており、そのような提案も行う意向だ。

なお、大ロットについては、当初の予定通り外注しているが、他の印刷会社との交流も密接になり、逆に小ロットについては仕事を請け負うことが増えている。まさに全印工連のいうコラボレーションを進めるきっかけとなっている。

今後の展開を聞くと、地域の個人需要を掘り起こしたいとし、そのために『ページマスターPro6500』の導入に併せて、これまで刷版設備があったスペースにプリントショップをオープンするとともに、ポスティングによるDM配布も行った。自費出版やサークル・団体の印刷物の注文も入り、効果も表れているほか、ここから企業の仕事につながった例もあり、波及効果もある。

「デジタル印刷機を導入して感じたことは、ハードの品質や生産性は重要なことではあるが、最終的にはどのようなサービスを提供できるかということだ。そしてその中で各社の強みをどのように発揮するかであり、当社は小ロットに徹したスピード対応とワンストップサービスになる。枚葉四色機を廃棄したことで、社員一人ひとりの意識を変えることが求められたが、少しずつ浸透してきた。さらに地域の方々に信頼される小回りの効く印刷会社に発展したい」（上原社長）。


「ページマスターPro6500」